

春ならいつも
君の隣に

熱海勘九郎

”リア充王”ゆきが大学の授業中に「今日さあ女子会しない？いつものメンバーいつもの場所でさ。お酒代は私が出すからね？いいでしょ？」という鶴の一声ならぬ”ゆきの一声”で急遽決まった今日の女子会。いつものように恋バナで話に火が付きみんなが寝静まったのは深夜4時。

まあみんなといってもリア充王と言われているゆきとほかの友達2人で計3人。ちなみにリア充王と呼ばれている所以はその名のとおり、リア充の中で最もリアル充実しているからだ。充実している上に王様って。いや王女さまか。

まあともかく私以外の3人はみんな彼氏持ちで青春を謳歌しているメンツだ。

はあ～とため息いや一息ついて、私は机の上に置いてあった手鏡で自分の顔を眺めてみる……ひどい顔。アルコールで顔は赤いわ、目は腫れぼったいわ、肌は手入れしてないわ。（こんなじゃ彼氏なんかできないぞ！）と自分に喝を入れてみる。でも効果はほとんど無いに等しい。

「どうしたの？自分の顔じっと見つめちゃって」というゆきの声が聞こえた。

私はとっさに手鏡を閉じた。

「そんなにビックリしなくてもいいんじゃない？誰だって鏡で自分の顔ぐらい見ることあるわよ。」

「なんとなく恥ずかしかったの。で、どう？頭痛いの治った？さっきずっとうなされてたけど。」

「え？うなされてたの？けどもう大丈夫。治りましたよ。」そっかと私は言い、こたつにスルッと首まで体をつっこんだ。

「美佳さあ～どうなのユウキくんだっけ？うまくいってるの？」とゆきは言った。

「うまくいってるも何もまだ一回しか一緒に出かけてないよ。なんにもありません。」と私はゆきに背を向けながらゆっくりと言った。その話はしたくありません全開で。

しかしそれとは裏腹にゆきは話を進めていく。

「いいと思うけどなあ～ユウキくん。結構モテてるし、顔だってまあまあじゃない。しかも美佳、クラス一緒でしょ。ユウキくん美佳のこと絶対守ってくれると思うけどな。」

「まあカッコいいと思うし、たまに誘ってくれるのはすごくありがたいと思うけど、あの人じゃないかなと思う。」

ゆきは少しこわばった顔で「もしかして美佳って理想ちょっと高いんじゃない？イケメンじゃないとダメとか？」

「そんなことはないよ。ただ今は恋愛とかそういう気分じゃないの。ユウキくんには悪いけど今は一人で満足してるの。」

ちょっと強がっている自分がいた。

ゆきは「ふ～ん。そう。それなら無理にとは言わないけど。」と言いながらとちょっとおトイレと席を立ちその場を離れてた。

トイレから帰ってきてしばらくして「ああ！」と何かを思い出したような声をだした。私はどうしたの？と返すと、

「そう言えば、昨年ハルくんっていたよね？ハルくんとはどうなってるのよ？」と言った。

(ハルくん！？)

私の中で何かが痛かった。

心臓がギュッてなるのをこの時初めて体験した。